



真宗新書

親鸞入門

一樂 真

Ichiraku Makoto

親鸞入門

もくじ

はじめに…… 8

私にとって宗祖とは…… 11

宗祖とは真宗とは…… 12

気づけない在り方―仮と偽…… 22

地獄・餓鬼・畜生の世界…… 35

誰もが救われていく道はどこか

―比叡山時代と六角堂参籠…… 43

比叡山時代に抱えた矛盾…… 44

夢のお告げといのちを終えていく身…… 54

葛藤の中で―赤山明神の物語…… 60

出口が見えない―断煩惱の苦しみ…… 66

聖徳太子に道を求めて―六角堂参籠…… 72

生き方の転換―法然上人との出遇い……………83

生死出ずべき道……………84

阿弥陀にたすけられないといけない人間……………93

阿弥陀・無量寿という世界……………99

誰の上にも開かれた道―本願に帰す……………108

わが身を知らされながら歩む……………119

本願を憶念する生き方……………128

私はどこに立つのか―弾圧と越後・関東時代……………133

念仏に対する誤解……………134

仏教とは何か―元久の法難……………141

危機感と伝える責任―興福寺奏状と承元の法難……………147

共に教えを聞き領き合う地平……………161

多くの出会いの中で―『教行信証』の背景……………173

念仏に生きる―帰洛をして入滅―……………183

聞思の人……………184

執われの心―三部経千部読誦……………187

悲喜の涙を抑えて―『教行信証』撰述……………202

南無阿弥陀仏に生きた生涯―著述と入滅……………213

おわりに……………223

親鸞聖人略年表……………229

あとがき……………236

凡例

- ・本文中の真宗聖典とは、東本願寺出版発行の『真宗聖典』を指します。
- ・『教行信証』からの引用文は、東本願寺出版発行の『宗祖親鸞聖人著作集一』（著作集一）にて表記しています。

はじめに

大谷大学で学生と一緒に親鸞しんらんしょうにん聖人のことを学んでいます。一樂真いちらくまことと申まをします。今回、「親鸞入門」と題して、宗祖親鸞聖人のご生涯しゅうぞに学んでいきたいと考えています。この「生涯に学ぶ」と言った場合、よく「生涯に何を学ぶのか？」と聞かれますが、「何を」というのは、はじめから決められるものではありません。それは親鸞聖人に「これ」を学ぶと言っても、どういう学びが実を結ぶかは、お一人お一人違うからです。しかし敢えて見当付けだけ申しますと、決して親鸞聖人の生涯について詳しくなるための学びではないと私は思っています。そうではな

く、親鸞聖人が生きられた、その生き方や、ものの見方、考え方にふれることを通して、私たちの生き方を学ぶ。あるいは、世の中には色んな問題があり、日々ニュースでも取り上げられておりますが、でも本当に問題なのは何か、という、その目の付け所を学んでいかなければいけないと思うのです。問題だ問題だと私たちは言いますが、何が本当の問題なのか、はつきりしていないのではないかと、いうことです。ですから親鸞聖人の教えに何を学ぶかといえ、何が本当の問題なのか、そしてその中から、私たちはどう生きるのかということを探ねていく、そういう機会にさせていただければと思います。

親鸞聖人は、一一七三（承安三）年に生まれ、一二六一（弘長二）年に九十歳でいのちを終えていかれました。時代は、平安時代の末期から鎌倉時代、世の中が大きく転換する中を生きられたわけです。その生涯においては様々なことがあつたかと想像できますが、その一つ一つを細かく見ていくことは、親鸞聖人も書物

にほとんど書かれていないため窺うことは難しいのが現状です。

しかし、後の方々が伝える伝記やお手紙からその様子を窺うことができます。それらを頼りにしながら、親鸞聖人の生涯に学んでいきたいと思えます。

まずは、私たちにとって宗祖とは何かについて尋ね、そして、比叡山時代と六角堂参籠、法然上人との出遇い、弾圧と越後・関東時代、そして帰洛と入滅と、大きく四つにわけて親鸞聖人の生涯に学んでいきます。

私にとって宗祖とは

宗祖とは 真宗とは

宗祖親鸞聖人の生涯に学ぶにあたって、まず「宗祖」という言葉について、どうしても確かめておかなければなりません。ご門徒もんとの方々は、「私の家は真宗である」、あるいは「私の家の宗派の祖師は親鸞聖人である」と、このようにお考えの方が非常に多いと思います。実際、私自身も石川県の小松という所の出身ですが、その真宗大谷派の家に生まれ、そして宗旨として真宗ということをはじめめに聞き、「ご開山かいさんは親鸞聖人である」と言っていて育ててこられたわけです。しかし親鸞聖人のお言葉を見ますと、宗派の祖師やご開山という意味で「宗祖」という言葉を使われていない。これがはじめに「宗祖」ということの意味を確かめておきたい理由です。

親鸞聖人は法然上人のことを「真宗興隆の大祖源空法師」〔『教行信証』著作集

一487頁）とはっきりと仰います。「真宗を興おこしてくださった、盛んにしてくださいました、その大もとは法然上人であります」という言葉です。それから同じくご和讃わさんでも、これは法然上人のはたらきを讃えられた、源空和讃の中に、

智慧光ちえこうのちからより 本師源空ほんじあらわれて

浄土真宗をひらきつつ 選択本願せんじやくのべたまう

（真宗聖典498頁）

と、明確に仰っています。「智慧光のちから」というのは、阿弥陀仏のおはたらきを意味しますが、その阿弥陀仏のおはたらき、その力の中から法然上人、源空上人は現れてくださった。そして何をなされたかという、浄土真宗を開いてくださった。そして選択本願を述べてくださったと、こう仰るわけです。ですから、親鸞聖人にとって浄土真宗は、法然上人が開いてくださった仏道のお名前な

のです。

しかし、疑問に思う方も当然おられるかと思えます。日本史の勉強の中では、法然上人といえは浄土宗を開いた人、そして『選択本願念仏集』(『選択集』)を書いた人と習うわけです。それから親鸞聖人は浄土真宗を開いた人、そして『教行信証』を書いた人と習う。この場合は宗派の名前です。真宗大谷派とか、浄土真宗本願寺派という、その宗派の元を親鸞聖人として私たちは相続してきているわけです。ところが親鸞聖人ご自身は「この真宗は法然上人が開かれた」と仰るわけです。ですから私たちが教団や組織、宗派のように使っている言葉とは違うということをはじめに確認する必要があります。

その上で「真宗」ということを考えていきたいのですが、『教行信証』の中で「真宗」という二文字について、親鸞聖人が振り仮名を付けておられる所があります。そこには「真」の字に「まこと」、「宗」の字には「むね」と書いておられ

ます。「真宗」というのは「まこと」の「むね」だと仰るわけです。「まこと」というのは本当という意味で、大和言葉では古くから物事やまとの中心を「むね」という二文字で言うそうです。身体からだでいえば胸です。建物で言えば棟です。漢字は違いますが、物事の中心という意味では通じているのだそうです。「宗」も「むね」ですが、「宀」は、家を表すそうで、それから「示」は、その家の中で神さまや仏さまをお祀りまつしている様子を表しているとされます。つまり何を中心にしてその家が成り立っているかという時に「むね」と読むのです。ですから一軒一軒のお家が何を大事だいじにしているのかと言ってもいいですが、もう少し言うと、私たちが何を中心ちゅうしんに生きているのか、という時にこの「宗」という字を使う。色んな先生方が、「これは抛り所よこという意味だ」と仰ってくださいています。本当に何を大切にしているのか、それが「宗」という言葉で表されているのです。

私たちは、何らかの抛り所よこを持っていない人はまずいないと思います。例えば

「私は無宗教です」と言う方もおられます。でも無宗教と言う方は、どの宗教にも拠らないということを拠り所にしておられるのです。かつて大江健三郎さんがノーベル文学賞を取られた時にインタビューで「私は無宗教です。しかし、宗教無き者にも祈りは有ります」と言われた。世界の平和であるとか、人間が傷つけ合わない、そういうことに対する祈りはあるということを言われました。どんな宗教にも拠りたくない人、無宗教の人であっても必ず何か「宗」とするものがあるという、これを共有しておきたいと思います。

その「宗」について、親鸞聖人は私たちに「あなたが持っている「宗（むね）」は「真（まこと）」ですか、本当ですか？」ということ聞いておられるわけです。これが「真宗」という言葉です。私なりの言い方になりますが、「真」というのは何時でも、どこでも、どんな状況でも通ずるのが「真」です。一方、特定の状況、ある場面でしか通じない、これは「仮（かり）」のものと言うのでしょ

う。

例えば「この大学に行きたい」といって来た人は目指すものがあるので、入学してからも勉強は続きます。ところが「どこでもいいから大学に入れればいい」と入学した人は、途端に目標を失う。こういうのを「仮」というのです。ですから大学入学までは頑張る、そのエネルギーにはなるわけですが、入学すること自体が目的ならば、入ってしまったええもう勉強しません。これは東京大学に行く人であつても、受験は突破したけれども、行って何をしたらいいか分からない人がいっぱいいるのです。またこれは大学だけではなく、会社に就職する時も同じです。就職試験を突破するというのは大変なことだと思えます。ところが、やっと入った会社でも一年もたない人がいっぱいいるわけです。最近では、時代が変わり転職が当たり前になってきたこともあるので、一つの所にしがみつ়く必要はもちらんないわけですが、しかし三年以内に仕事を辞めてしまう若者が四割とも言わ

れています。就職試験の時には、それを突破することが最大の目標であったはずですが、そこで働いて何をするのかが見えていないと、目標を達成した途端に消えてしまう、そういう目標は「仮」なのです。ですから受験のために勉強するか、就職活動のために頑張るとか、もっと言えば大人になって家を建てるために一生懸命に稼ぐとか、色んな目標がありますが、それは完成した途端に消えるものなのです。それを「仮」のもの、一時的な目標というわけです。

さらには、抛り所に行っていることが逆に自分を縛ってくる場合があります。一番分かりやすいのは、「健康で長生き」というのは誰もが願う喜ばしいことだと思います。しかしどれほど健康に気を付けていても、病気になることがあります。あるいはもっと長く生きるつもりだったけれども、早く終わっていかなければならないということもあるわけです。そうしたら元気で長生きが私の抛り所だと、もしそれにこだわったらどうなるでしょうか。病気になってしまったら自分

を「もう価値が無い」と逆に苦しめるかもしれません。

例えば、スポーツが得意で「僕は野球ができるのが生きがいです」と言っていた人が、大きな怪我をしてもう二度と野球ができないような身体になったら「こんなのは、僕の身体ではない」と。気持ちは分かります。人一倍運動ができたわけですから。しかし、その野球をできることが自分の価値だと決めつけている限り、もうできない身体になったら、「自分はもう生きている意味が無い」というようになるわけです。運動できる、健康ということ自体は嬉しいことなのですが、そうでなくなったらダメだと思い込んでしまう。こういうものを親鸞聖人はもう一つ「真」に対して「偽ぎ」と言います。それにこだわることに、それを大切にだと思いつくことによって、逆に自分を縛ってくるのです。色々な抛り所をそれぞれお持ちでしょうが、それは本当ですかかと。いつでもどんな状況になっても、それはあなたの生きる抛り所といえますかかと。これが「真宗」という言葉

に親鸞聖人が託されたことです。

親鸞聖人ご自身が法然上人を「真宗興隆の大祖」、「宗祖」だと仰あおいでいると先ほどふれましたが、法然上人を通してこの真宗を教えていただいたのが親鸞聖人です。それは、「法然上人に会うまで、私は真宗を知らなかった」ということです。和讃には、

本師源空ほんじいまさずは このたびむなしくすぎなまし

（真宗聖典498頁）

と、こういうお言葉も残っています。「法然上人がこの世においでにならなかつたならば、自分はこの一生をむなしく過ぎ、終わっていたに違いない」と。ですから、親鸞聖人ご自身が法然上人を通して真宗に出遇うことができた。その時に法然上人のことを「宗祖」と呼んでおられるわけです。ですから我々にとっても

同じことが言えないと、親鸞聖人のことを本当に「宗祖」とは仰げないと思うのです。私たちは、たまたま生まれた家が浄土真宗だったと、その浄土真宗という宗派では親鸞聖人が宗祖と言われていたと、こういう話です。自分では宗祖と仰いでないのに、家ではそうなっていますという話ですから、これは本当の「宗祖」にはならないと思うのです。繰り返しますが、親鸞聖人ご自身は「私にとって、本当の拠り所を教えてくださいださったのが法然上人です」と、これが法然上人を「宗祖」と仰がれた一番根っこの部分です。こういうことが私たちにもなくてはならないということです。

これから宗祖親鸞聖人の生涯を学んでいきますが、「宗祖」と言われている親鸞聖人のことを学んで詳しくなる、そんなことではなく、私にとって真宗とは何だろうかということを探ねていく、はつきりさせていくことが、親鸞聖人を「宗祖」と仰げるかどうかの分かれ道なのです。その時に親鸞聖人が仰ったのが「浄

土真宗」という四文字です。少し分かりやすくするために補いますと、「浄土こそ真（まこと）の宗（むね）ですよ」と仰っている。もっと強めていえば、「浄土こそ真宗ですよ」という言葉です。浄土が何時でもどこでもどんな状況になっても、私たちの生きていく拠り所ですよ」ということを呼びかけてくださっている言葉です。それで「ああ、そうだ！」となればいいのですが、私自身も若い頃から浄土真宗の教えを聞いていますが、朝から晩まで浄土が私の拠り所です、とは思っていない。他のことに心を奪われている瞬間がいかに多いか、あれも大事、これも大事、というようなものです。浄土が本当に大事です」ということは、色んなことの中で確かめさせられることなのです。

気づけない在り方——仮と偽——

先ほど偽と仮のことに少しふれましたので、例を挙げてお話してみたいので